

雨粒の 行き先

著者・望月 葵



名もない道のほとりに同じような存在の木々が並んでいる。街路樹と呼べるほどそれが立っているわけではないが、不思議なことにそういった微妙な空間が人々の憩いの場となっているらしい。

そんな穏やかな雰囲気の中、俺もひと休みしていた。ここから目的地まではまだまだ遠いからだ。

しかし、そんな幸福な時間を邪魔する輩が現れる。

「やっと追いついたぞ。 さあ、てめえの持ってるお宝をよこしな」

「やだ。つーかくつろいでんだから帰ってもらえる」

「な、何だと」

何だと、じゃねえんだよ。脅せばビビるとでも思ってんのかこのタコ。

「ふ、ふん。可愛がりのある奴だ。ちょっくら痛い目に遭わないとわからないようじゃねえか、お嬢ちゃ」

得意の顔面蹴りっ。

「ああヘッドッ」

「このアマ、ヘッドに蹴りかますたあどういう了見だっ」

「うるせえ。問答無用だ、ぶっ飛ばす」

無礼者をはっ倒した結果、水びたしになったざっと十数人の小山ができあがったのである。

それから数時間後、俺の後ろには縄につながれた盗賊どもの姿がざっと二十数人ぐらいの列を作っていた。まるで偉い身分のつき人みたいに見えるが、もちろんまったくもって違う。こいつらは不届き者である。

まあ、中にはそうと知らないただの物盗りもいるけどな。

おっと、失礼。俺の名はスクータとって、歳は十五の元気な少年さ。実は今ちょいとのお使いを頼まれてな。それをこなしている最中なんだよ。

ああ、言っておくが、隣町までチーズを買いにきたみたいな類じゃないぞ。

「ちゃーっす。ここが賊の取引所」

「いや、賊の取引所じゃないんだが。まあ警備管かつはここだよ。誰に頼まれたんだい」

「えーっと、ヒランツっていう人」

「あ、ああ、ヒランツさんね。じゃあこれ、ご苦労さま」

妙に引きつった表情をされながら、金貨の入った小袋を受け取る。何であんな顔するんだろうか。

まあ、俺はその人に会ったことないから知らないのだが。ならどうしてその人の名前を口にしたかという、ばあちゃんにそう言われたから。途中まではもらった路銀で食いつないでいけるが、なくなったら自分で仕事探して稼げ、とのことだった。

手っ取り早いのは、アリのように群がってくる連中をぶちのめして先ほどの名前で取引所に行く方法だ、と父さんが教えてくれたのでやっていたわけである。

報酬を受け取っている間に、この集落の宿屋で飯がうまいところを教えてもらったので、今日はそこに泊まることにする。目的地には、あと一日あればたどり着くだろう。

少し早いですが、本日の旅はここで終わりとし、明日に備えることにした。

太陽に挨拶をされるころ。あっちも機嫌がよいようでさんさんと光り輝いている。この地に住まう人々もさわやかな朝を迎えられたようだ。

身軽になった俺は、名称はフリッグの玉というアイテムを割らないように荷物で固定し出発した。

そうそう、このフリッグの玉というのはこの世界でも貴重品中の貴重品で、この世に二つしかないものだ。これは、雲をつかさどる神の力が宿っているとされ、反対側の地域にも雲の力が伝わるように奉納されるものなのである。

ついでにいうと、今いる場所は雲の神様を奉っている雲の神殿から逆の方向だ。目標の地があるラフィラーズの町にむかっていて、フリッグの玉を無事届けるのが俺の役目。そう、現在遂行中の任務だ。

とはいえ、足をむける先にはいくつかの関門がある。ひとつはすでにでてきた犯罪人たちだが、奴らのほかに魔物も出没する。魔物、とは文字通りの連中で、姿形も人間とことなることが多い。やっかいなことに、人より力が強く乱暴者だ。まあ、幸いなことに頭はあまりよくないので、その点を突けば一般人でも対処できるだろう。

んまー、種類によってピンキリ、だけど。

ふたつめは関所だ。ここは武力を使うところではないが、書類という邪魔モノがいる。いくなればとおるための手続きのことだが、金払わなきゃならないし、身分も証明しなきゃならない。性格によっては、こちらのほうが面倒という人もいるだろう。

まあ、それもその人が持つ思考の違いゆえ一概には言いきれないが。

時刻はそろそろ昼どき。だいたいの人間の腹がなるころかという時間帯に、ようやく関所の建物が見えた。だが、中に入れないのか、道という道が人の頭で埋めつくされている。キ口数で表すと、十はいきそうだ。

どうなっているのか知りたいので、ちょうど隣にいた行商人の格好をしているおっちゃんに声をかける。

「おっちゃん。今日は何か祭りでもあんのかい」

「いや、そういう意味じゃないさ。何だか知らないが関所の中に入れないらしい」

「へっ、何で」

「さあ。前からの情報だと川が増水して渡れないとか言ってるが」

「増水〜っ、こっちはここ数日の間に降り続いたっけ」

「降ってないさ。わしゃここに五日前からいるが、な」

どうもおかしな話だ。現在の天気は晴天、気持ちのよい雲は流れているが雨を降らすようなそれではない。

「そっか。おっちゃん、ありがとな。それとそのリングいくらだい？」

「おお、悪いな坊主。六個で銅貨四枚だ、まけてやるよ」

「さんきゅーっ、んじゃこれで」

さすがは商売人だ、気前がよくて助かる。ちなみに自分の地元では銅貨がもう二枚必要だから

、それに比べると安いってことで。

事情を話してくれたおっちゃんに礼を言いながら、俺は蛇の頭を目指す。

それから人をかきわけ続けて三十分が経過した。ようやくの思いで先頭にたどり着いた俺の耳に届いたものは、その場を守っている役人の怒声。彼らは、声のごとくに槍を振り回しながら周囲を相手にしていた。

関守は、関所の入り口から見て半円状の空間を作り出し、それ以上踏みこめない状況を作っている。

とはいうものの、これではラチがあかないので一番近くにいた役人の懐へと移動した。

「なー。何で川渡れないんだよ。雨なんて降ってないんだろ」

「うわっ。何だこのガキは。どっから入った」

「どこからって。その辺の人ごみからに決まってるじゃないか。それよりどうし」

「ええい、原因は今調査中だっ。わかったならお前も戻って報告を待ってろ」

「五日以上調べてんじゃないのか、だったらどうしてわからねえんだよ」

「なっ、そ、それは」

おー、とても素直な反応で助かる。やっぱり手を焼いているようだ。

普通の増水ならば、おそらく身近に原因があると思われる。例をだすなら、さっきの質問内容と同じ雨が上げられるかと。

だが、根元がわからなければ元の子もないのではないだろうか。それがもし『普通の人間』ではわからないことだとしたら。

この場合は急速かつ堅実にこなしたほうが得策だろう。

「仕方ないな。俺が力を貸すよ。通れないなんて困りすぎだ」

「なっ、これは我々の問題だ。お前のようなガキが首を突っ込むところではない！」

「何言ってるんだよ、一週間近くもまごまごしてるくせに。それに、あんたらじゃ荷が重すぎると思うぜ」

「き、貴様」

「だってそうじゃん。今だって水と雲の精霊が警告だしてんのに気いついてないのはどこの誰だよ」

このような言葉のやりとりをしているうちに、お互いの視線も鋭くなっていく。しかし、そんな緊迫感を取り除いたのは一枚の分厚いとびらだった。

関所の入り口を守るそれは、重いうなり声を上げながら徐々に開かれていく。とびらの向こう側には、見知らぬ白ヒゲのおっちゃんが立っていた。

「やめないか。その方は未来の神官様、無礼を働くことは許さぬ」

「こ、これはヴァラステス殿。お見苦しいところを」

「スクータ様。この者たちの非礼、代わってお詫び申し上げます」

「あ、ああ、どうも。それよりさ、中に入れてもらえろ」

「もちろんでございます。さあ、お入りくださいませ」

ヴァラステスという名を持つ男が現れた途端、態度を一転させた役人たちは道をあけてくれた

。中には俺の正体に納得がいかない様子もうかがえたが、どのように思われようがどうしようもない真実だ。にらまれようが陰口を叩かれようが変えようのないこと。

俺は、気を改めて案内されるがままについていった。

用意された椅子に座ると、さっそく、

「それでさ。どういうことなのか説明してもらえるかい、ヴァラストスさん」

「かしこまりました」

という返事を受け取ったあと、彼はそのまま話を始めた。

目的の町であるラフィラズとこの関所の間には、シャベットという名称の川が流れている。この川の流れるは穏やかで、暑い季節には子供たちがよく水浴びをしているらしい。

しかし、七日前から状態が急変してしまい、水量が増加。そのせいで橋をかけることができな
いであるとのことだ。

もちろん、この場に常置している役人たちが走り回って情報を集めたり調べたりしているが、
いっこうに糸口が見つからず今に至っている。

「なるほど。ってことは原因もわかっていないんだ」

「情けないことにそのとおりでございます。我々では手も足も出ませぬ」

「だろうね。ところでヴァラストスさん」

「スクータ様、わしのことはどうかヴァラとお呼びください。あなた様にそのように呼ばれる
のはどうも」

「あ、そう。んじゃ、そう呼ばせてもらうよ。ところでさ、話飛んじゃうけどヴァラは俺のこ
と知ってるの」

「もちろんでございます。最後にお会いしたのは、そう、確かおばあさまの後ろをついて歩い
ているときでございましたな」

そ、それってもう十年以上前のことなんじゃないのか。

「もう御年十五になられましたか。いやあ、時がたつのも早いものです」

いやさ、そこでしみじみ浸ってる場合じゃないと思うんだけど。

「と、とにかくさ。このままじゃどうしようもないだろ。ちょっくら俺が調べてくるからここ
とおしてよ」

「い、いけませんっ、御身に何かあったら」

「何言ってるのさ。ここの入り口にきて気づいたことだけど、水と雲が警戒だしてんだって。
ほかの奴が調べたってわかるわけじゃないじゃん」

「そ、それは」

「だろ。彼らの声はそれぞれの神官やその血筋にしか聞こえないんだ。ばあちゃんや父さんた
ちのようにちゃんと聞きとれるわけじゃないけど、はるかにマシだろ」

「た、確かにそうですが」

「んじゃ決まりだ。今は緊急時ってことで書類はあとで書くから。今後の対処は頼むよ」

そう口にし強引に会話を断ち切る。じゃないと、いつまでたっても終わらないからね。

行動に移した俺は、まず入り口とは正反対にあるとびらへと歩きだす。大きなドアのそばにい

た人に開門を願い、出口は真ん中から開き始め自分の使命をまっとうする。それは、先ほどより軽めな音を響かせながら俺がおるのを待ってくれた。

とりでを抜けると、目の前には、はんらん寸前までに水位が上がった川が姿を現す。水の流れは、幼い子が遊べるような速さでは到底ない。

「大雨が降ったならまだ納得できるけど。やっぱヘンだな」

思わずひとりでくちびるを動かしたあと、俺は巻き込まれないように岸へと近づく。もう五メートルほど行けば危ないところまで歩き、そこから水に向かって両手をかざした。

ーイ。コーーナニーウ……ニ……ル。

やはり、何かが精霊たちを怖がらせているようだ。こま切れにしか聞こえなくとも、彼らの感情はきちんと伝わるので理解しやすい。

ちなみに今の声は水の精霊のそれであって、人が発する音ではない。ヴァラとの話でも述べたが、それぞれの属性に属する神官やその家系にしか耳に入れられないのだ。

どういうことかという、この世界には水を始めとした土、火、風、それに雲や星、太陽や木といった自然には、すべて精霊が宿っているという信仰がある。実際にいるいないの個々に関わる思考は省いたとして、そのように信じられているのである。

もちろん俺はいるに決まってると思うよ。だってちゃんと聞こえてるんだから。

それはそうとして、だ。実をいうと、神官の言葉はここからきていたりする。

つまり、その立場の人間は、精霊の声を聞き一般の人々に伝えるという職業ってこと。別に難しいことはなく、誰かの伝言をほかの誰かに回す、と考えてもらえればわかりやすいだろう。

しかし、問題は原因だ。精霊たちの言葉をつなげて考えてみると、どこかに怖いと感じる何かがあるはずなのだが。

今いる場所の川は、上流のほうだ。奥には山が存在しており、そこからしたたりでる水が川の源流となっている。ちなみに、ここと中流の間には滝が存在していて。

ふと、空を見上げる。もっと上の部分と思われるところに、やたらと雲が固まっていた。まるで積乱雲のような形をしたその中心は、丸く白い玉が四方八方に動いている。

もちろん、普通の人々には見えない動きだろう。

雲の導きに従い、俺の行動範囲が決まっていく。

上へと行くにつれて、歩きづらい道や大きな石が邪魔をするが、これは自然の原理なので仕方がない。

しかし、精霊たちが示した場所へと赴くと、川の流れがますますおかしいことになっていた。どうたとえればよいのか少し困るが、強いて言うなら水が共食いしあっている、と表現しようか。

絵的に表すならば、波状になっている水同士がぶつかりあっている感じだろう。

まあ、どうしても不気味な現象以外なんでもない。

雲がたちこめている下にやってくると、案の上の結果になっていた。というのも、天然の貯水湖の真ん中には、毒々しさを感じる赤紫色をしたシャボン玉の化け物がいたのだ。

しかもだ。あいつらは仲がよいようで、ブドウのように集まっているのではないか。

「何者ダ」

「俺かい。俺は誰かさんだよ」

「何ダ、ト」

あー、別にふざけているわけじゃないぞ。こういった輩に、素直に名乗るのは危険だと判断したんだ。もしこいつから個人情報がお外にもれたら、今後の生活を脅かしかねないからな。

「俺の名前なんてどうでもいいさ。肝心なのは、この増水がお前の仕業だってことだ」

「ダッタラドウスルノダ、私ヲ止メラレルトデモ」

「お前、頭悪いな。何で俺がここまでこれたのか考えれば答えは簡単だろ」

「フッフ、頭ガ悪イノハオ前ダ。タトエ水ノ精霊ニカヲ借りタトシテモ、オ前ニ私ハ倒セナイ」

どうやらこいつ、いらん知恵をつけてしまっているようだ。

簡単にいうと、同じ属性を持つ相手には通用しにくいという法則がある、ということだ。奴が言ったとおり俺のもっとも得意とする属性は水で、方法は魔法。敵である奴には効きづらい。

だがそれは、ある意味間違っている。それは、対峙しているのが俺、だから。俺は普通の神官候補ではないのだ。

とはいうものの、格別な内容でもない。そう、ただ単に純血な水の神官じゃない、ってだけだ。

つまり、俺には水の神官とは違う血筋もはいつているということ。もうひとつの血は、雲をつかさどるもの。だから俺には雲の異変も感じとれたのである。

そして、そんな俺には不思議な体質も身につけている。双方の加護を受けるのかどうかはわからないが、雨が降ると己が持つ力が強化されるのだ。

確実にしとめるには、この場合力を上げたほうが手っ取り早い。だが、考えなしに使うわけにもいかないのが神官の弱点だろう。ほかの魔道士たちと違って直接精霊に語りかけて力を借りるので、必要以上に引き出してしまうのだ。

もしそんなことになってしまったら、自然の摂理が破壊されてしまい、最悪生き物が住めなくなる。

あいつはたぶん、そういったことをふまえて倒せないと言っているのだろう。

気色悪いシャボン玉は、辺りに水で作った玉状のものを浮かばせながらこちらをうかがっていた。

「やってみなきゃわからないだろ。モノは使いようってゆーじゃん」

まるで悪あがきするかのような口調でいきり、敵の持つ属性に合わせた対抗策を作りあげる。この場合は、同じ性質である水ではなく、雲のそれを集め攻撃体勢にはいる。

手に集まった雲属性の魔法は、そのままブーメランの形に変化。まるで霧で生成されたかのように透きとおっている武器は、文字のごとくのはたらきをしてくれるものだ。

向かいあっているものの力量を測るためにひとまず攻撃。三日月の動きをした俺の得物は相手の真ん中辺りを切りつけ、手元に戻ってきた。しかし、ダメージを受けわれてしまった部分を、同じように存在している周囲の仲間が分裂し傷を復元してしまったではないか。

「ククク、今、何かシタカ」

いったいどこから発しているのかわからないが、勝ち誇ったようにしゃべるシャボン玉。妙にしゃくにさわるのは俺だけか。

そんなイラつきを抑えながら、次の作戦を考える。あいにく俺は、このふたつ以外の属性は使えないのだ。

しかし、物理攻撃が不得意な俺にとってはほかに方法など存在しない。

仕方がないので、雨乞いの魔法を使うことにした。この魔法は、水や雲の神官が雨を降らせてもらうよう神に祈る魔法だ。本来ならばひどい干ばつのときに用いるものだが、俺の場合、生まれ持った体質のため、特別に今のような状況でも使うことを許されている。

先ほども言ったことだが、雨が降れば俺の力は上がる。上昇したことによって、与えられるダメージも増えるのだ。

時間が惜しいのでさっそく雨乞いにとりかかる。やりかたは簡単で、水と雲の精霊にお願いし、それぞれ必要なものを運んできてもらうだけ。あとは待つだけだ。

とはいえ、ただつたっているわけにもいかない。向こうは新たに行動を起こした俺を邪魔しようと、自分の体を投げつけたり発生させた水の玉を放ったりしてくる。魔法をとえながらかわしているのが時間がかかり、体力勝負に持ちこまれてしまう。

だが、勝敗は決した。無事に魔法が完成し、雨が降り出したのである。

天からの恵みを受け、俺はもう一度雲属性のブーメランを作り出す。先ほどよりもふた回り以上大きいそれを、力いっぱい投げつけた。

威力も遠心力も高まった武器は敵の頭部と思われるふさの部分を通り抜ける。どこからともなく苦痛の叫びが耳を直撃したが気を取られはしない。目の前には、バラバラになった『奴ら』がいたからだ。

今度は数に任せて体当たりを仕かけてくるが、先ほどの攻撃が効いているようで動きが鈍っていた。完璧にかわせるほどに落ち込んだスピードでは、この俺サマを捕らえるなんて不可能。持ち前の瞬発力を生かしてひと粒ひと粒つぶし、不気味なシャボン玉はオリジナルと同じ末路をたどった。

増水の元凶を倒してから、川の流れは徐々に落ち着きを取り戻していく。荒波は消え、水辺は穏やかな風に身をゆだねながら輝いている。

本来のすがすがしさだろうその姿に、俺は深呼吸と背伸び、最後は笑顔で表した。視線の先には、平和になった貯水湖に住む精霊たちが楽しそうにたわむれていから。

事をすませた俺は、自らの目的を達成させるために急いで戻る。近づいてきた関所からは、ごった返しているらしい声が聞こえてきた。おそらく、川が静まったのを見て役人が開放したのだろう。

一般の人とは逆の方向からやってくると、出口付近でヴァラと初対面の男が待っていた。とはいっても、制服の型が他の役人と同じで色違いなだけだったので、ここを取り仕切る長だというのはすぐにわかった。

「スクータ様、よくご無事で」

「大げさだって。まあ、ずぶ濡れになっちゃったけどな」

「この度はお手をわずらわせてしまい、申し訳ありませんでした。通行書はすでに発行しておりますゆえ、こちらでゆっくりと」

「いや、服を着替えたらずぐ町へ向かうよ。気持ちだけもらっとくから」

「し、しかし」

「いいんだって、本人がそう言ってんだから。俺としても、早くコイツを届けなきゃなんないしさ」

そう話すと、関守長殿は説得が無理だと判断したのか、わかりました、とだけ告げる。

彼のため息に感謝と申し訳なさをまぜつつも、奥の部屋で着替えをすませにいった。

素早く終わらせた俺は、用意してくれた書類を受けとり、普通の人とは違う通路をとおった。別に特別専門の道とかいうのではなく、役人たちが使っている裏口のような場所を通過しただけにすぎない。そのほうが時間短縮できるからね。

狭い出入り口を守る番人に通行書と身分を説明し通過。ヴァラの口ぞえとマーキュリーの玉のおかげで、ここも問題なく通りこした。

関所の先には、豊か溢れる水源とみなもに輝く太陽の光が出迎えてくれ、軽い足取りでラフィラズの町へとむかう。

やっとのことでたどり着いたときは、すでに夕日の出番が終わりを告げていた。

「スクータ様、長旅でお疲れでございましょう。宿を予約してありますので、今日はこちらでお休みください」

「ありがとう。明日の朝から行動すれば洞窟にすぐ行けるかな」

「はい。この町の中にございますので」

「わかった。じゃ、お休み」

一礼した彼を見送ったあと、目の前にある大きな宿屋に床をめざした。

日が変わり、ヴァラは宿のカウンターで待っていてくれた。

「おはようございます。夕べはよくお休みになられましたか」

「ああ、おかげさまでぐっすりだ。んじゃ、案内してもらえるかい」

「かしこまりました」

まるで本物の主人と従者のような会話の中、俺たちはフリッグの玉を収める場所である雲の洞窟へと足を運ぶ。

少々曲がりくねった街路を歩いていくと、一軒の屋敷にたどり着く。視界に入れたときは首をかしげてしまったが、雲の洞窟に関してはたしか、町をとりしきる人物が住む建物の裏あるということをおぼろげに思い出す。

なるほど、どうりででっかい家なわけだ。

大きな門をくぐり中へと案内されると、外とは違った内装やヘンな格好をした男がいた。よい年しているだろうおっさんをひと言でいうと、変人、である。

「あらあつ、カワイイ子だ・こ・と。もしかして次の神官候補ちゃんかしら」

ひいっ。ななな、何だこの口調はっ。

「怖がらないでもいいのよおん。とって食べようなんしなから。ふふ、ホントはそうしちやいたいんだけど、ねっ」

と言いながら、ウィンクをひとつ。ヤバイ、ヤバイぞ、こいつ相当な危険人物だ。とっとと終わらせて帰ろう。

「お、お初にお目にかかります。早速ですが、フリッグの玉をお持ちしましたので奉納しますね」

「いやだわ、そんなもの明日でもいいじゃないの。それより、アタシとどこかでお茶しましょうよお」

「けけ、けっこうですっ。お、俺、次の用件が待ってますからっ。ヴァラ、場所知ってるんだったら教えてくれっ」

「わかりました。ではヒランツ様、御前を失礼致します」

このおっさんがヒランツだったのかよおおっ。世の中どうなってやがんだ、おかしいだろーがっ。

俺はたじたじになりながらも、ヴァラのおかげで何とか恐怖の館から脱出に成功。彼の案内の元猛ダッシュで洞窟へと行き役目を果たした。

その帰り、ヴァラは言う。

確かにオカマ志向があるが、とても親切で気前のよい主だ、と。

な、なんつーのかな。他人の好みだからつべこべいう資格はないんだらうけどよー。

だったら始めっから説明してくれればよかったのに。ばあちゃんも父さんもひでえや。あ、考えてみれば母さんもグルっぽいな。あーもう。

そんなこんなでひとつの旅は終わった。ここで学んだことは、世界は広い、ということだろー。

うん、世の中いろんなモンがあり、そしている。

それが面白くもつまらなくもしている要因なのかもしれない。

あとがき

「雨粒の行き先」をご覧いただき、まことにありがとうございます。いかがでしたでしょうか。

この小説はたしか、通信で小説を勉強してたとき課題のひとつ、だったよーに記憶してます。記憶があいまいなんですけどね（汗）どちらにしてもかなり前に書いた作品です、ハイ。なので、これというエピソードがないんです。わはは、すみません。

電子書籍のことを知っていてもたってもいられず、表裏になりそうなものを引っ張り出して書き直して投稿っ、みたいなノリでした。欲望を抑え込んでもロクなことないですし(笑)

枚数的には四〇〇字詰め原稿用紙三十枚ほどです。あまり長すぎても、電子書籍の場合は疲れそうなので、このぐらいにしました。

これから書き溜めていった作品をどんどん書籍化していきますので、これからもよろしく願いします。

六月五日生まれ。

今作の「雨粒の行き先」で電子書籍初デビューを果たす。

無料ブログにて小説を書き続けていた経歴があり、得意なジャンルは冒険ファンタジー系である。

普段は某派遣会社で販売員を勤めている、見た目は小さな一般人だが、中身は変わり者。

楽しさを追求しながら、本日も文章について勉強している。

日記ブログ

☆月影につき☆

<http://tsukikagenikki.yamatoblog.net/>

連絡先

aspiringwriter.sakka@gmail.com

著作権について

当作品、および、望月 葵が創作した文章、イラストは著作権法によって守られています。従って無断で全文、一部の転載や引用などは著作権法に違反しますので、おやめください。